

愛媛県立中央病院 消化器内科

【住所】〒790-0024 愛媛県松山市春日町83番地 【病院長】西村 誠明 先生 【病床数】864床 【内視鏡検査・治療数（H23年度）】上部消化管内視鏡検査 約6,500件、下部消化管内視鏡検査 約2,600件、ERCP 450件、小腸内視鏡検査（カプセル内視鏡含む）30件、上部ESD 110件 【スタッフ】医師11名（常勤専門医7名、研修医4名）、看護師8名（うち内視鏡技師5名）、他（事務、洗浄員など）3名 【保有内視鏡本数】上部用20本、下部用12本、十二指腸用3本、小腸用1本、超音波内視鏡2本（コンバックス1本、ラジアル1本）



多数かつ広範な症例を背景に
経験豊富なエキスパートによる手厚い指導体制で
次世代を担う優れた人材を育成

消化管、胆膵、肝臓に特化した3つの専門チームが協業し 多数かつ広範な消化器症例に対応

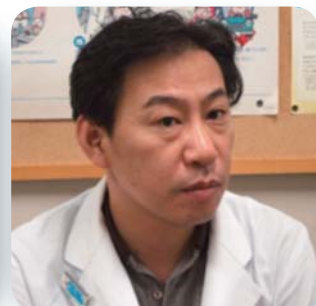
愛媛県の医療圏は東予、中予、南予の3つで構成され、このうち松山市を中心とする中予医療圏は県全体の人口143万人のうちの約45%が居住する地域です。愛媛県立中央病院はこの中予医療圏の三次救急を担う地域の基幹病院であり、救命救急センターを備えて24時間365日体制で多発外傷、心筋梗塞、大動脈解離、脳卒中などの最重症、緊急症例を受け入れています。

同院の消化器内科では、このような地域背景のもとで救急医療と高度先進医療の両立を実現するため、消化器疾患に対する診断や治療の専門性を高めるとともに、医師一人ひとりの分野横断的な総合力を備えることも重視しています。消化器内科主任部長の二宮朋之先生は、「消化器内科は消化管、胆膵、肝臓の3つのチームから構成され、経験豊富な指導医がリーダーシップを発揮して診療にあたっています。それぞれのチームが常に連携して診療を行うことで、各分野のエキスパートが知恵を出し合い、内視鏡治療だけでなくIVR治療や化学療法も含めた総合的な内科的治療を実践しています」と、同科の特長についてご説明いただきました。今年4月に同院に赴任され、胆膵チームで主査をとられている消化器内科部長の宮田英樹先生にもお話を伺ったところ、「以前私がいた施設と比べると、当院は診断や精査よりも治療や処置目的の症例が非常に多いことが特徴的だと思います。ここでは、日常的な疾患の治療から難易度の高い症例まで、非常に広範な疾患への対応が求められます」と述べられました。二宮先生は、「当院は教育研修施設でもありますので、人材育成にも力を入れています。常時初期研修医3名、後期研修医4名ほどが消化器内科で研修を受けており、各チームの専門医がマンツーマンに近い形で指導しています。症例数も多く、また疾患も多岐にわたるため、当科は研修医だけでなく若手医師が短期間で確実に実力をつけるには最適の環境だと思います」とお話になりました。宮田先生も、「まずは自分で考え、実際にやってみることが重要ですので、指導の際はなるべく横から手を出さずに見守ることを心掛けています。とにかく症例がたくさんありますので、前回の課題を短期間のうちにすぐ調整できることもあり、若い先生が技術を身に付けるスピードはとて

も速いと思います。優れた人材が育って組織が充実すれば最新の技術も迅速に導入できますので、今後は診断や精査の方にも力を入れていきたいです」とコメントされました。実際、宮田先生が赴任されてから同院のEUS-FNA件数が四国でトップクラスに数えられるようになるなど、その環境は着実に整えられつつあります。



消化器内科主任部長 消化器病センター副センター長
内視鏡室長
二宮 朋之 先生



消化器内科部長
宮田 英樹 先生

消化器外科との緊密な連携で 患者利益を高める最新治療をいち早く導入

消化器疾患に対する集約的な医療を展開するため、愛媛県中央病院では2008年12月に消化器病センターが設立されました。消化器病センターでは消化器内科と消化器外科が協働してチーム医療を実践し、患者さん一人ひとりの病態に合わせたテーラーメイドな診療を、診断から治療まで一貫して行っています。診療科の垣根を越えたネットワークの一例として、経口内視鏡と腹腔鏡を同時に用いて行う、胃癌に対する新しい手術法「レックス」の導入が挙げられます。通常、腹腔鏡手術では胃の外側しか視認できませんが、経口内視鏡を併用するこの方法を用いることで胃内部の病変を正確に把握することが可能となり、切除範囲の最小化が期待できます。

▶次ページへつづく



消化管チームの主査を取られている消化器内科医長の谷平哲哉先生は、「今年から使用可能となった大腸ステントは、手術前の減圧目的での留置が適応となっていますので、消化器外科の先生と情報交換を行い速やかに導入しました。患者さんにとってメリットの高い治療法ですので、タイムラグなくスムーズに実施できたことは意義が大きいと思います」と述べられました。



消化器内科医長
谷平 哲哉 先生

病院の更なる機能強化を図るため、2013年5月の完成を目指して新病棟の建設が現在進められています。消化器病センターの内視鏡室もこの機会に大幅なレイアウト変更をして新しく生まれ変わります。検査室は現在の3室から5室に、透視室は現在の1室から2室にそれぞれ増室され、特に透視室を増やすことで気管支鏡とERCPを同時に行えるようになります。また、回復室のベッドやトイレの数を増やすことで、より効率の良い患者さんの受け入れを可能にし、年々増加する検査や治療にハード面でも対応できるようにするそうです。二宮先生は、「新設するトイレのうち1つは、車いすやベッドのまま患者さんが移動できるよう、広いスペースを確保しました。内視鏡を受ける患者さんの状態は様々ですので、検査や治療のための負担を少しでも軽減するよう考えました」と、待望の新しい内視鏡室についてお話しいただきました。



新病院完成イメージ図

「断らない、すぐやる」をモットーに 地域連携の強化とそれを支える優れた人材育成を目指す

愛媛県中央病院は2010年10月に地域医療支援病院として承認され、これまで以上に病病連携、病診連携を図るなど、地域医療に貢献しています。消化器内科は従来から周辺施設からの紹介患者を積極的に受け入れてきたこともあり、昨年の院内全体の紹介患者のうち1割を占める実績があります。上部消化管に関しては当日のオーダーで内視鏡が可能な体制を整えているため、地域からの信頼も厚く、現在の症例増につながっているそうです。二宮先生は、「地域の先生に安心して患者さんをご紹介いただけるよう、とにかく“断らない、すぐやる”をモットーに長年やってきました。こうした体制が可能になったのは、看護師が内視鏡室専任となっていることも大きいです。8名の専任看護師のうち5名が内視鏡技師の資格を有していますし、夜間も1名オンコール体制を取ってもらっているので、我々医師も安心して手技に集中できます。現在、昨年と比べて医師の数が少ない状態ですが、看護師の専任制により医師の負担が減ったので何とかやっていけています」とお話しになりました。夕方5時以降の緊急内視鏡も少なくないことから、限られたスタッフであらゆる処置に対応できるよう、処置具は各種いつでも使用可能のように分かりやすく整理された状態で準備しており、スタッフの細やかな心遣いが伺えました。

最後に二宮先生から、「高齢化社会を背景に、地域連携は今後ますます重要になるでしょう。周辺施設の先生方との信頼関係を継続し、さらに強化していくためには、多様なニーズに確実に応えていくことが大切です。そのためにも、今後とも優れた人材の育成による組織強化を実現していきたいと思います。近年医師不足が課題となっていますが、当院は救急病院でありながら癌の症例も多く、オールマイティに消化器疾患を学習できますので、今後こうした環境を活かして医師やスタッフの教育体制の強化に力を注ぎ、次世代を担う優れた人材を育てていきたいです」と、力強いコメントをいただきました。



消化器内科のみなさん